

特別報告

The 30th Triennial Congress of the ICM in Prague に
参加して曾山小織¹, 米田昌代¹, 吉田和枝¹

2014年6月1日(日)から6月5日(木)までの5日間にプラハで開催されたThe 30th Triennial Congress of the ICM in Pragueに参加し、3名各々がポスター発表を行った。学会のメインテーマは「Midwives: Improving Women's Health Globally」で、2015年度が達成年度となる国連のMillennium Development Goalsのうち「Improve maternal health」という目標を担っていた。

1日にオープニングセレモニーが開催され、学会期間中に126か国から約3,800名の参加があった。一般演題の抄録投稿数は約1,300で、当日発表されたのは口頭453演題、ポスター189演題で、我々は3日にポスター発表を行った。

曾山の発表は「Interaction between medical workers and pregnant women in prenatal checkup」であった。日本の母子保健の国民運動計画である「健やか親子21」では、出産に関する安全性と快適性の確保を目指している。これをふまえ妊娠期から妊婦のセルフケアを促進して出産の安全性と快適性を増すため、妊婦健康診査で医療者が妊婦にどのようなやり方で問診している

か縦断的に観察を行い、その結果を報告した。

米田の発表は「The current and future challenges of post-discharge grief support in Japanese health centers for mothers and families following perinatal death」であった。日本では周産期に児を喪失した母親・家族に対して医療施設退院後のグリーフケアのシステムがない。そこで、多職種が連携して社会全体で支える新しいシステムを開発するために、産科・NICU施設から地域へのグリーフケアの連携の現状と課題を明らかにすることを目的とし、日本全国の保健所・市区町村保健センターを対象に実施した質問紙調査の結果を報告した。

吉田の発表は「The current and future challenges of post-discharge grief support in Japanese Obstetrics Departments and NICUs for mothers and families following perinatal death」であった。米田の研究目的と同様で、日本全国の母子医療センターを対象に実施した質問紙調査の結果を報告した。

学会に参加して、世界の母子保健の課題に関する報告に触れ、視野を広げることができた。



¹ 石川県立看護大学

Participation in the 30th Triennial Congress of the ICM in Prague

Saori SOYAMA, Masayo YONEDA, Kazue YOSHIDA